

# 病害虫発生予察地区報 第2号

—— 地区注意報 ——

病害虫名：トマト黄化葉巻病

病原ウイルス：Tomato yellow leaf curl virus

## 1 情報の概要

令和3年9月、南信地域のトマト栽培施設において、トマト黄化葉巻病の発生が確認された。また、同施設内においてタバココナジラミ（バイオタイプQ）の発生も確認された。施設栽培においては越冬し、今後発生が拡大する恐れがある。

## 2 対象地域

南信地域のトマト栽培施設

## 3 根拠

- (1) 本年9月、南信地域のトマト栽培施設で、葉縁部の黄化や葉巻、葉脈間の黄化、頂葉部の縮れ等、トマト黄化葉巻病に似た症状が多数確認された（図1）。野菜花き試験場においてPCR法による遺伝子診断を実施したところ、被害株はトマト黄化葉巻病であることが判明した。また、同施設内にはタバココナジラミが発生していたことから、幼虫を採集し、野菜花き試験場においてLAMP法による遺伝子診断を実施した結果、タバココナジラミ（バイオタイプQ）であることが判明した。
- (2) 病原ウイルス（TYLCV）は、タバココナジラミによって媒介される。

## 4 防除対策

- (1) 苗の導入に際しては、ウイルス感染やタバココナジラミの発生がないものとする。
- (2) 施設栽培は、開口部に0.4mm以下の目合いの防虫ネットを張り、開放状態にしない。また、光反射マルチ資材等を設置し、媒介虫の侵入を防ぐ。
- (3) 施設、ほ場の内外に黄色粘着板や黄色粘着テープを設置し成虫の早期発見と捕殺を行う。
- (4) 施設内やほ場周辺の雑草や野良生えトマトは、タバココナジラミの発生源となるので、除草剤の散布や抜取り等を行い適切に処分する。
- (5) トマト黄化葉巻病に似た症状を発見したら、直ちに株を抜根してビニール袋等に入れ密封し（40℃、10日以上）、完全に枯死させる。その後、残渣は土中に埋却するか、焼却する。冬期栽培しない場合は、施設を開放して低温状態にする。

## 5 参考（タバココナジラミ（バイオタイプQ）について）

- (1) 本種は、平成17年に国内で初確認され、長野県でも平成25年にトマトで発生が確認されており、同年9月に特殊報を発出している（平成25年9月13日付病害虫発生予察特殊報2号）。また、令和2年には地区報を発出している（令和2年10月22日付病害虫発生予察地区報第6号）。
- (2) 本種成虫及び幼虫が葉裏に寄生して吸汁加害し、虫体からの分泌物と分泌液に発生するすす病による葉や果実の汚れやトマトの着色異常果の発生原因となる。
- (3) 本種成虫は体長が約0.8mm、翅は白色で体は淡黄色。近縁種のオンシツコナジラミと比較して静止時の翅が背面で重ならず、腹部が見える（図2）。
- (4) 本種4齢幼虫は長さ0.8～1.0mm、体色は黄色～淡黄色。中央が厚く縁が薄い楕円形の三葉虫型で、周囲に刺毛状の分泌物が目立たない（図3）。オンシツコナジラミの4齢幼虫は乳白色で厚みのある楕円形のコロッケ型で、周囲に刺毛状の分泌物がある（図4）。羽化後の抜殻で見分けやすく、タ

バココナジラミに比べてオンシツコナジラミは厚みがある船底型となっている（図5、6）。

- (5) タバココナジラミのバイオタイプについては、形態上の差異は認められていないため、肉眼での識別は不可能である。
- (6) 本種は低温に弱く、本県では野外越冬はできないと考えられるが、施設内では越冬し、発生が拡大する恐れがある。
- (7) 本種は、一部の殺虫剤に対して感受性が低いため、通常とは異なる防除対策を講じるとともに、拡散防止に努める必要がある。農薬については、病害虫防除所や農業農村支援センター等に相談して使用する。

また、「ウリ類の退緑黄化病」(CCYV 本県では未発生)を媒介するので、注意する必要がある。



図1 TYLCV 感染株



図2 タバココナジラミ成虫



図3 タバココナジラミ幼虫



図4 オンシツコナジラミ幼虫



図5 タバココナジラミの抜殻



図6 オンシツコナジラミの抜殻

長野県病害虫防除所 中南信担当  
鈴木 正幸 (所長) 水谷 俊英 (担当)  
TEL : 0263-53-5642 FAX : 0263-54-4508  
E-mail bojo-y@pref.nagano.lg.jp